いじめられっ子のいじめっ子への逆襲エッチ？

一

女子に体育館裏に呼びだされて、うきうきと向かっていたとき。

辿りつく一歩手前のところから記憶がなく、今に至る。

目を覚ましたそこは全体的に白っぽく、寒々とした雰囲気の手術室のような一室。

まさに俺は患者のように、固い台上に仰向けに倒れている。

だけ、ではない。

手足を広げさせられ、手首と足首を金具でがんじがらめ。
起きぬけで、体に力が入らないせいもあるが、びくともしない。

手術台のようなところに拘束されているだけでも「なんじゃこれええええ！」だが、不穏なことは、さらに。

金具で顔も固定されて、その真正面にあるのは、でかでかとしたモニター。

今は電源オフで、画面が暗い。
とはいえ、鏡のように自分が反射するのを見るに、いやな予感がしてやまない。

舌打ちして、画面から目をそらすと、重重しい扉が開く音が。

「やあ、ゴウシくん、意識を取りもどしたんだね」

金庫に設置してあるような、分厚い扉の向こうに現れたのはクラスメイトのシイノ。
もとい、俺らのオモチャのいじめられっ子。

チビで鈍くさくて、ぼっちの根暗。
のはずが、白衣を着て、眼鏡をかけているせいか、お高くとまったインテリっぽい。

手に持つものが、より、そう見せているのだろう。

電マだ。

「おいおいおいおい！
たしかに、お前をストレス発散のためのサウンドバックにして、罪悪感ゼロに、とことん痛快さを味わったけどな！
裸にするとか、自慰を録画するとか、エロいことを強要しなかっただろ！
百歩譲って、復讐されてもいいが、せめて、自分のされたこと、し返せよ！」
台の手前でとまったシイノは「ああ、勘ちがいしているよ」とにっこり。
「ぼくは望んでイジメられていたんだ。

たかがクラスメイト一人イジメているだけで、世界征服果たしたみたいにご満悦になってさ。
めでたく勘ちがいしたまま、痛々しく自分に酔っているのを眺めるのが、たまらなくてね。

ああ・・・おだてりゃ木も登る豚みたいでスバラシかったよ。

チョロイ豚さんの愛らしい滑稽ぶりを、いつまでも鑑賞して愛でていたかったけど、ほかにも目的があったから。

つけ上がりにつけ上がって、その最高潮になったところで、膨らみきった万能感を叩きつぶすっていうね。
そのときの顔が見たいがため、初めから狙ってイジメられていたわけ。

だから、ぼくはイジメられて、屈辱を覚えていないし、きみを恨んでもいない。
逆に謝らないといけないな」

「ごめんね」と笑ったまま、小首をかしげて「や、やめろおおお！」に聞く耳持たず、俺の腹に馬乗り。

ポケットから、女子がメイクで使うビューラーのようなものを。

いやな予感がしまくって「おおおおおお！」と手術台をがたがた。
それしきの揺れでは、シイノを振り落とすことはできず、金具で固定された顔に、その金具が。

目元に装着されると、瞼が上げっぱなし。

金具に肌が引っぱられ、やや眼球がとびだしたままの状態に。
そうして、ふたつの目を剥くようにされ、電源オンで、明るくなったモニターを見せられて。
画面には、実験体のように拘束された俺が。
「な・・・！」と血走った目を揺らすと「ここにね」と眼鏡の真ん中にある、小さい斑点に指が差される。
同時に画面にも、丸い影が。
「小さいカメラがついているんだよ。
高画質には撮れないけど、録画して記録を残すのが目的ではないから。

きみが、おもちゃでイタズラされて、ぼくに犯されるのを、きみの開きっぱなしの目に、最初から最後まで見せつけてあげたいんだ」

想像をはるかに上回る変態プレイの強要。
全身血の気の引く思いがし「やっぱり、怒ってんじゃねえか！」と情けなく声を裏返しつつ、叫ぶ。

「こんなの倍倍倍返しだろ！
もう仕返しじゃなくて、犯罪だ！」

「犯罪の響きはいいね・・・」

まさに猟奇的殺人犯よろしく口角を吊りあげるも「でも『仕返し』は心外だな」と電マを俺の口に押しつけた。

突っこまれて、電源オンにされてはたまらない。
というか、画面に写るざまにして、もう目も当てられない。

電マで脅しておいて「いい子だね」と微笑みかけたなら、片手で器用にYシャツのボタンを外していった。

カメラが顔からそれたのはいいとして、Yシャツが肌蹴ていくのを見せられては、鼓動が早まり、頬が赤らむようで。
自分の体と分かりきっているのだが・・・。